

# マンスフィールドと 弟レズリー・ビーチャム

玉 井 武

I

Katherine Mansfield は、六つちがいの弟 Leslie Heron Beauchamp と一番気があつたらしい。故郷の New Zealand から Mansfield の母が Charlotte, Jeanne, Leslie の三児を連れて、1911年の春ロンドンへ着き、戴冠式の盛儀を目のあたりに見て、祖国の繁栄に感激の思いを深めた時、Mansfield 自身は、その日の光景を軽妙な筆に草して、寄稿先の New Age 社におくつた。たまたま姉の文章を旅先のロンドンで読んで、Leslie (愛称 Chummie) が一家中の誰よりも深い感動を受けたことは、彼がその時知人にあてた手紙の一節に知ることが出来る。

“She is exuberant, Idie,—her work is conquering London. Don't you see the triumph in sight? Physically dear, she is splendid, better than I have seen her since our arrival.”

高校を卒業したばかりの多感な十七歳の少年は、首都ロンドンに於ける姉の華やかな活動に、子供らしいあこがれと誇りを胸一杯に感じたのであつた。姉の Mansfield がこの弟を憎からず思つたことは、Alpers のマンスフィールド伝の次ぎの文に徴しても明らかである。

It is evident that a feeling of special kinship was awakened

between them at this time, and that Katherine enjoyed Chummie's trust as well as his admiration.

## II

Mansfield の夫 J. Middleton Murry の編集になる “Journal of Katherine Mansfield” の 1915 年 5 月の記入の後に、Murry は次ぎのような註を加えている。

After some weeks in rooms in Elgin Crescent, in July we took a house at No. 5 Acacia Road, St. John's Wood. Here Katherine Mansfield's brother, Leslie Heron Beauchamp (Chummie), came to stay with her for a week before going to the front at the end of September.

即、第一次世界大戦の折、New Zealand から遙々英本国応援の軍隊が送られたのであるが、その一員として再びロンドンを訪れた Chummie は、幼少の頃から気の合う姉 Mansfield のもとを訪れることをどんなにか楽しみにしていたことであろうし、姉も亦心から愛弟を迎えたことは想像に難くない。秋の夕に時の逝くのも忘れて二人が語り合つたことは、主に 幼い時の思出——故郷の懐しい山や川についてであつた。Mansfield はその時の様子を “Journal” の中で次ぎのように書いている。

夕べ

十月 彼等はアカシア通りの庭を往つたり戻つたりして歩いている。夕暗のたちこめる時分である。野菊が羽根のようにあざやかだ。庭のはづれの古い果樹——ポプラみたいにひよろつとした木——から、石のようにかたい、小さな丸い梨の実が一つ落ちる。

「今の音きこえた？ 姉ちゃん。見つけるにいい？ 本当に——よくきいた音だ。」

二人の手は、まばらに生えた草のしめつた上をなでる。弟が拾い上げて、昔の仕草そのまゝに、ハンカチでピカピカに拭く。

「あの古い木に物凄く沢山梨がなつたの覚えている？」

「すみれの花壇のそばでしょう」

「あの寒い南風が吹きあれたあと、着物籠をかついで拾いに出かけたつげなあ！」

「かがんで拾つてると、木からおちて来て背中や頭にぶつかったんでない？」

「随分遠くまで散らばつて了つて、ずっと向うのすみれの中や、段からゆりの花壇の辺までもころがついていつたでしょう？草の中にペしやんこに踏まれてるのもあつたつげ。そうなるもと蟻がみる間にたかつてねえ。あの小さな丸い穴のまわりに茶色の胡椒をふりかけたようなのが、今も目の前に浮んで来るようだ。」

「御存じかしら、もうあれつきりあんな梨は見たことがないつてこと。」

「つやつやしたカナリヤ色の小さな梨だつたねえ。皮がとつても薄くて、種は黒いの——真黒さ。姉ちやんは軸の処をさきにもいでおいてから吸うんだ。ちよつと酸っぱそうにして、やがてパクツと頭からかぶりついたものさ——芯ごとね。」

「種だつておいしかつたわ。」

「ピンク色した庭の腰掛にかけたことは覚えてる？」

「あのピンク色をしたお庭の腰掛忘れられないわ。あれは私にたつた一つのお庭の腰掛よ。今どこにあるのかしら？天国に行つてからもあれに腰かけさせて貰えると思う？」

「いつも少しぐらぐらする腰掛で、よく蝸牛のはつた跡がついていたねえ。」

「あそこに腰をかけたまゝ、脚をぶらんぶらんさせて、梨を頬ばつて——」

「僕達の幸福がどんなに深いもの——どんなに確かな——深くて、輝いて

いる、温かいものだつたかということは不思議なくらいじゃない？ 二人して顔を見合つては、にこにこつとした様子など、僕まだ覚えてるよ——姉ちゃんは？——二人だけの内証の秘密があつたね……どんなことだつたかしら？」

「家庭感情だつたのよ——私達は二人が一人みたいだつたわ。一緒に歩いて、同じ眼で一緒に物を見て話しあつてるといふ処を、いつも思い出すのよ……ついさつきもそう思つたの——草の中で梨をさがした時にね。すみれの葉を一緒にがさがささせてたことなんか思い出したわ。あゝ、懐しいお庭！」

「僕達の見つけた梨の中に、小さな歯の跡がついているのもあつたのを姉ちゃん覚えているかい？」

「えゝ」

「誰が噛つたのかしら？」

「それがいつも不思議だつたのねえ」

片方の腕を姉のからだに添えて、二人は往きつ戻りつする。円い月影が梨の木を照らし、庭の蔦のからんだ壁は金属のように光る。大気は冷えて、重たく、とてもつめたい。

「いつか帰つてみましょうよ——みんな終つたら」

「一緒に帰りましょうね」

「そして何もかにも見つけて——」

「何もかにもね！」

姉は弟の背にもたれる。月影は深くなる。二人は家の裏に向いている。明りが四角く窓に見える。

「手を貸して頂戴な。私がいつもこゝではよそものなのを御存じ？」

「えゝ、分つてるよ姉ちゃん」

「もう一回往復してから、中へ入りましょう」

「とても不思議だなあ、僕は戻つて来るという絶対の確信があるんだ。この梨と同じように確かなものに感じるんだよ。」

「私もそう云う感じがするわ。」

「帰つて来ないでは居られないんだよ。この気持分るでしょう。すごく不思議な話だけど」

草の上におとす影は異様に長い。怪しげにさつと吹き立つ風は蔦にさゝやきを交わし、かけた月は二人を銀色に照らす。

姉は身ぶるいする。

「姉ちゃん、寒いんでしょう」

「とても寒いの」

弟は片方の腕を姉に添えて、にわかにキス——。

「さようなら、姉ちゃん」

「あら、どうしてそんなことを云うの？」

「姉ちゃん、さよなら……さようなら！」

快活で、幻滅を味わされていない二十歳の若さのこの弟こそは、誰よりも Mansfield の心に近く居てくれていた身内の者であつた。両親との確執に心痛めていた時分でも、Chummie の若さは、姉との間に異質の物の入るのを許さなかつた。今や愛情はその深さを加え、愈々二人だけのものとなつていつた。姉の幼い頃の思出の庭に通ずる木戸を思いきり大きく開けることはこの弟だけがなし得たことであつた。

### III

この故郷を遠く離れたロンドンでの語らい、姉弟の隔てない懐旧談は Mansfield の創作精神をその根底から揺すぶり、正しき方向づけを与えずにはおこなかつた。Mansfield は最愛の弟——この世にたゞ一人の弟——を独仏戦線に送つて、自分の進むべき道をじつと見つめた。長い間彼の女の胸に低迷していた創作上の問題が、自然に解決の方向へと向つた。この間の消息を、彼の女の夫、J. Middleton Murry は、Knopf 社版 “The Short Stories of Katherine Mansfield” の序文で次ぎの如く説明している。

The war had come as a profound spiritual shock to her, as it did to many less gifted writers of her generation. For a long period the chaos into which her thoughts and ideals and purposes had been flung remained unresolved. Then slowly her mind began to turn back towards her early childhood as a life which had existed apart from, and uncontaminated by, the mechanical civilization which had produced the war. The crucial moment was when, in 1915, her dearly loved younger brother arrived in England to serve as an officer. Her meeting with him formed, as it were, a point round which her changed attitude could crystallize. They talked over their early childhood for hours on end, and Katherine Mansfield resolved to dedicate herself to recreating life as she had lived and felt it in New Zealand.

「アカシア通りで Leslie と共に過した時間は実に短い束の間のものであつたが、この僅かな時間に於て、Mansfield は自己の想像力の根底を培い育ててくれた懐しくも愛着深きもの——それと絶縁状態となつていた為に英国の生活は全く根の浮いたものとなつていたのであるが——再びその尊さを発見することが出来た。「自己の過去及び故国」との心の和解——分裂した己が才能を結合させる為に彼の女が必要としたもの——は、まさに完璧の域に達しようとしていた」——と Alpers もそのマンسفールド伝に述べている。

#### IV

愛弟 Leslie は1915年9月の末に、アカシア通りをたつて、手りゆう弾兵将校としてフランスに渡つた。10月7日の Ploegsteert Wood の手りゆう弾投てき実習中に、手りゆう弾が彼の手の中で爆発するという惨事がおこつた。「マンسفールド書簡集」に於て夫君 Murry が加えた説明によれば、愛弟事故

死の悲報が姉 Mansfield にあたえたショックは非常に大きく、彼の女は二人で最後のひと時をおくつた思出の家にはもう一刻も住んで居られぬような気持で、今にも家と土地とをあとに国外に逃げださんばかりの気配であつたと云う。Alpers の伝える Leslie 最後の言葉は：

“Lift my head, Katie, I can't breathe.”

であつたと云う。姉 Katie にしてみれば、まさに胸をえぐられるような、哀切極まる一句であつた。

この頃の Mansfield の心境を “Journal” に求めると：

十月二十九日 起きてごらん、起きてごらん、ねえ、ちよつと。一面霧だらけの晩よ。私は死を恐れないばかりではなく——進んで死の問題を考えてみたいと思つている——ということを書きつけておきたいの。私は不滅を信じたい、だつて彼はこの世に居ないんだし、私は彼と一緒にになりたいんだもの。それにはねえ、チャーミー、私達二人のためにまづしておかなければならないことがあるの。それから参りますよ、出来るだけはやくね。チャーミー、あなたがそこに居ることは分つてますよ。私はあなたと一緒に暮してるのよ。私はあなたのために書いているんですよ。外の人達も私の近くに居るけれど、すぐそばではないの。私はあなただけのものよ、ちようどあなたが私のものであるように。誰も私が毎日どのくらいあなたのところに居るか知らないの。本当に、私はいつだつてあなたと一緒にくらしているんですよ。私がこの家とこの場所を立去る時、私があなたと一緒にになると云うことをあなたが知つていると私は感じはじめました。それに、もう短い時間でも、私はあなたから離れませんよ。私の心はもう誰のものでもありません。チャーミーが私をとりこにしてみました。そしてチャーミーは私の心の中にも、からだの中にも宿つています。人にあげるのは「余りもの」の愛情ですけど、あなたには、あなたのためには、最も深い愛情を湛えて、これを捧げます。ひとなどは……もう……どうでもいいのです。

悲しみをこらえて、Mansfield は自分の心の糸を静かにたぐつてみた。幼かりし日の家族の姿、故国 New Zealand の四季の風物。とりとめもなく心に浮ぶそれらの背景に、寂しくのこる愛弟の面影。Mansfield は尚しばらくはこの傷手から立直ることが出来ない。夫 Murry をさそつて、南フランスの地に傷心のからだをいたわりに行つた Mansfield の胸中には、愛弟とのかたい約束——New Zealand Story——が横たわつていた。

十一月、仏国バンドールにて、弟

私にとって人生が終つたということは、随分前からわきまえていた筈と思うけれど、実は弟の死ぬまではまだ本当にわかつていなかつたのだ。そうだ、弟はフランスの小さな森の中に横たわり、私はまだ立ち歩きして、日の光や浜風を感じるが、彼と同じく私も死人である。現在と将来とは私に何の意味もない。私はもう人に対して物珍らしさを感じない。私は何処にも行きたいとは思わない。何か私にとって価値があるとすれば、私達の生きていた時分に起つた事や、あつたものを、それが思出させてくれるという点にある。

「姉ちゃん、覚えてるかい？」弟の声が木立や花の中、香りや光、影の中から聞えてくる。遠くの方の人達は別として、一体、私のために存在してくれてる人があるだろうか？それとも又、私とその実在を認めなかつたから、人はいつも私をすてゝ、かげをひそめたのだろうか？インディアン・ペーパーナイフをいじくりながら、私がテーブルに向つて腰かけたまゝ死んだとしたら、どんな相違があるのだろうか？何も相違はないでしょう。それではなぜ自殺しないのか？それは私達二人がともに生きていた美しい時代に対して、果すべき或る義務を私が感ずるからだ。私はそれについて書いてみたいし、弟も私にそれを書かせたがつていたのだ。ロンドンの小さなてつぺんの部屋で、そのことを二人で話しあつたものだ。私は本の扉に、「弟レズリー・ヘロン・ピーチャムに献ぐ」と書くことにするわ——とこう云つたつけ。そうだ、きつとそうしよう。

以上は“Journal”に求めた Mansfield の心の姿である。Murry は Bandol

までついて行つたものゝ、亡弟の傍が姉の心から離れないのを見て、三週間の滞在の後一旦帰国した。Mansfield は、こゝで身体の不調とたゞかいつゝ、次第に創作に心を集注する生活に近づいてゆく。自分が本当に書きたいと思つているものは何か？ 自分は以前のような作家気分を失つて了つたのか？ 以前程に書く必要が切迫したものでなくなつたのか？ —— などと彼の女は真剣な自己反省を試みる。

今こそ私は故国の思出を書きたい。そうだ、私のもつているものを全部さらけ出しつくすまで、私の故国について書いてみたい。弟と私がそこで生まれたのだから、それが祖国に払う「神聖な負債」であるという理由からばかりではなく、私が自分の考えの中で、思出の場所のすべてを弟と共に歩きまわつているためでもある。私はこれらの場所から遠くはなれてはいない。私は作品の中で、それらを再びよみがえらせた。

あゝ、あの人達——私達が故国で愛した人達——この人達についても私は書いておきたい。これも亦「愛の負債」だ。本当に私は短い時間でもよいかから、未知の祖国を旧世界の人々の目の中に跳びこませてあげたい。それは神秘的で、漂つているようなもので、目を見張らせるものでなければならない。．．．．私は何もかにも皆書こう、七五番地では洗濯物を入れる籠が、どんな風にきしんだかということまで。しかし、皆神秘感、光輝、残照をそえて語らなくてはならない。なぜかと云えば、私の心の太陽とも云いたいお前が没して了つているんだから。お前は目もまばゆい地平に落ちて了つたのだ。今こそ私は自分の任務を果さなければならない。

それから私は詩を書きたい。私はいつも詩のほとりでふるえているようだ。アーモンドの木、小鳥たち、お前のいる小さな森、お前の目には見えない花、お前が私の肩にもたれている夢をみながら、よりかゝつている開いた窓、それに何かお前の写真が悲しそうに見える時分など。それよりかお前のために、長い哀歌のようなものを書いてみたい。．．．．多分それは韻文ではなくて、散文でもなくて、きつと「特殊な散文」と云うようなものになるだ

ろう。

そして最後に、いつか出版される日のために、小さなノートのようなものをつけておきたい。それだけでよい。小説もいらぬ、問題小説も不用、単純・卒直を欠くものはすべて不用。

これは1916年1月22日、Bandol に於て誌るした“Journal”の一節であるが、南仏滞在月余を経て、漸くその考想も明確な形をそなえて来たことがうかがわれる。しかし彼の女の筆はまだ動き出そうとしない。きびしい自己反省を加えてもみる。ある時は自分の意志を疑つてもみる。翌13日の日誌には、

あゝ、一旦正しく火がともりさえしたなら——どんなに自分は燃焼してゆくことだろう！……書きものをしていないと、弟が私をよんでいるような気がして来る、それに弟は仕合わせではないのだ……

と苦しんでいる。然しそのような思いも漸くにして苦境を脱し、少し宛考想が具体化して来る。New Zealand を舞台にして、何か書けそうな気がして来る。英国から再び戻つて来てくれた夫 Murry と、Villa Pauline での生活にも明るい光が流れだして来た。2月14日の日誌は次ぎの如く伝えている。

親愛なる弟よ、私はこんな覚え書を書きとめながら、お前に話しかけている。あの大きな不平の日誌をつけていた時には、私は誰に向つて一体書いていたのだろう？自分に向つてだつたのだろうか？然し今、これらの語を書きつけて、ニュー・ジューランドの雰囲気に達するなど語り出すとき、私はお前と向い合つて坐り、お前の考え深くかゞやいた目を見ている。そうだ、私はお前に向つて書いているのだ。私達は旅行をしていた——おたがいに向き合つて、とても速く動いていた。あゝ、チャーミー、この大きな悦びから、私はどれほど遠くはなれていたことだろう。私がペンをとるたびに、お前は私の許に来る。お前は私のものだ。お前は私の遊び相手、私の弟だ。二人で祖

国の隅々まで歩こう。私に物が見えるのは、お前と一緒にいる時だけ、だからはずきりと見えるのだ。これは一大神秘だ。チャーミー、私はこの数日間疑っていた。私は恐ろしい所に居た。とても抜け出してお前のところへ来ることなど出来ないと思つた。然し今、だしぬけに霧は上りはじめ、お前がそばに居てくれることが分つた。お前がまだ存命で、少し離れた所から私がお前に書いていた時よりも、お前は今、この瞬間の方がずっといきいきした感じで私のところに居てくれる。お前が私を——私の大好きな呼びかたで——「姉ちゃん」と呼ぶ時、お前の唇はほゝえみに高まる、お前は私を信じきつている、私がかゝと一緒に居ることを知つている。おゝ、チャーミー！ 私のからだに両腕を添えておくれ。．．．．．どんなに願ひは強くても、私の意志は弱いのだ。何かするということが——たゞ自分のために、自分ひとりで書くということにすぎなくても——とても面倒なことなのだ。私の願ひが非常に強い時には、その理由を神様がちゃんと御存じなのだ。私達と一緒に坐つて——覚えています？——懐しい昔のことを、最後のこまごましたことや、最後の気持まで、お互いに顔見合せて、話が終つた時には、どんなにはつきりと二人が理解しあつているかを目で示しながら、仲よく語り合うのが、いつも私達の心からの喜びであつたように、あのよう二人でまたやつてみようね。このごろ私はとても不仕合せで悲しかつた。恐らく新らしい生命によみがえるなどということはない、自分はまだ立ち上つてはいないんだ——こんな風を感じていたのだ。．．．．．然し今はもう疑ひが晴れた。自分独りで書いているのではないという考えである（これはいつも持つていた考えなのだが、今夜ほどはつきりと心に抱いたことはない）。私が書く一語々々に、私が訪ねてゆく場所毎に、お前を連れて行つてゐるのだという考えである。本当にそれが私の本のモットーかもしれない。テーブルの上に雛菊がのつていて、その花の中に、ケシのような赤い花が一輪、さつと輝き出している。雛菊について書いてみよう。暗闇について、風について、それから太陽と霧について。波止場について。あゝ！お前の大好きだつたもの、私も好きで心に感じているもの——そういうもののすべてについて。今夜は大変はつきりと

して来た。何べん書いても、書き直しても、もうふみまようことなどはない。チャーミー、本はきつと書き上げてみせる積りよ。

## V

こうして Mansfield は沈黙の苦痛を破る気魄を次第に生み出していった。「自分のなさねばならぬこと——それは弟との誓いを守つた姿を示すさゝやかな記録を、毎日忠実に書きとゞめることだ」と彼の女は観ずる。ポケットに片手を突込んで歩く姿の弟、じつと考え込んでるような眼差の弟、別れの際に姉の眼蓋にのこして行つた愛弟の姿が、寂しそうな影を添えて彼の女の心に映つて来る。弟を不幸にしてはならない。その手をとつて、話しあわなければならない。Mansfield には漸くペンを執る機会が熟しだして来た。こゝに見出されたものが即ち“The Aloe”であつた。1916年2月16日の彼の女の日誌は、その悦びを次ぎの如く語っている：

私は今朝“The Aloe”を発見しました。それを読みかえして、昨日は自分がまだ十分だとは思えませんでした……。然し“The Aloe”は大丈夫です、美しい作品です。魅せられてしまいます。お前が私に書かせたいと思つている作品ですよ。その最後の章を何にするかもはつきりしています。それはお前の誕生——秋に生れて来たお前のことです。木の下でお祖母様に抱かれていますお前、あのおごそかさ、あの立派な美しさ。その手、その頭、地上に横たわつている頼りないじらしさ、しかし何よりもあの美事なおごそかさ。この章で本は終るのです。次の巻はお前と私とのものです。そしてお前はリンダにとつては世界を意味しなければならない。それに、お前が生れないうちから、ケザリアはお前——彼の女のボーシィ——と遊ばなければならないし、おゝボーシィ——私は急がなくてはならない。皆がこの本を持たなければならない。結構なもの、私の宝物！チャーミーさん、結構でしょう。私達の考えていたものずばりでしょう。

このようにして Mansfield は全力を傾けて、この作品にむかつた。「私のそば近くお前に居て貰いたい。私はこの本に没頭しなければならない。そうすれば私は幸福になれる。自分を失つて、お前を見つけるのだ。」と彼の女は必死の姿である。どうしても書き上げなくてはならない。製本をおえ、カバーをかけて、祖国 New Zealand に送らなくてはならぬと、全力を傾けた。このようにして脱稿した “The Aloe” が、今吾々の手にする “The Prelude” の前身である。J. Middleton Murry が “The Short Stories of Katherine Mansfield” に寄せた序文の中から、次ぎの文を引用してこの稿の結びとする。

Her brother's death a month later confirmed her in her purpose, and shortly afterwards she left England for Bandol in the South of France, and began to work on a long story of her childhood days called “The Aloe,” which was published in a revised and shortened form in 1918 as “Prelude.”